



▲コンピューター制御の溶接機

町内の会社 紹介します

渡辺鉄工所
所在地 白磯
代表取締役 渡辺秀雄氏

医療用ベットの部品 などを製造

渡辺鉄工所は、主に医療用ベットの部品と、コンクリート二次製品（擁壁用のボックススカルパートなど）の中心部を製造加工している会社です。

ベット用部品は大・小さまざま

まで、約一〇〇種類もが作られます。最近ではベッドの上げ下げが手動から自動に変わるものもあり、部品もそれに合わせて作られます。材料は、ほとんどが鉄で、従来手動で行っていた溶接作業を、コンピューター制御の機械で行い、作業効率の向上が計られています。

（社長さんのお話）

現在は機械化が進んできているが、進歩すればするほど、より一層優秀な人材が必要になってくる。どんな仕事をするのも、もともになるのは人間だからね。これからは、技術力、設備力を充実させて関連した仕事の中から新しい物への挑戦もしていきたい。

町長 ひとりごと

齊藤 讓

鈴の鳴る道

最近読んだ一冊の詩画集に、頭を殴られたような激しい衝撃と、思わず体が震えるほどの感動を受けた。この本は、教育委員の森正夫先生が是非にと贈ってくれたものであり、又、前教育委員長鈴木正先生が「地下水」という町が発行する社会教育誌の中で激賞、推せんされているものである。「鈴の鳴る道」と題するこの本は、五十枚ほどの野の草花が描かれた水彩画とそこに添えられた短かい詩と、著者の歩みや心境を語る随筆から構成されている百頁に満たない詩画集である。ここに描かれた絵は、どれも繊細で、何ともいえない暖かさがあって、心が安まる思いであり、又そこにたどたどしい文字で添えられた詩は、平易ではあるが、一言、一言が宝石のように輝き、純粹で、心が洗われるような快い響きをもっている。

この著者は、星野富弘という四十一歳の男性で、手足の不自由な障害者である。群馬大学教育学部を卒業後、高崎市内の中学校に体育教師として赴任し、わずか二カ月後にクラブ活動の指導中頸髄を損傷し、手足の自由を失ったのだという。若くして、絶望の淵にたたき落され、死ぬほどの苦しみや悩みを克服し、口に筆をくわえて文字や絵を描くことをおぼえ、ここに自分の生きる道を見出したのである。まさに、筆舌に絶する不自由な状態で、血の滲むような苦心と努力の中から生まれた詩や絵には、一点のくもりも、暗さもない。作品は、あらゆる苦悩や世間のしがらみから解脱した汚のないものばかりであり、見る目、読む目からポロポロと鱗がはがれ落ちる心地がする。随筆の一部を紹介してみよう。

『道路を走っていたら、例のごとく、小さなでこぼこがあり、私は電動椅子のレバーを慎重に動かしながら、そこを通り抜けようとした。その時、車椅子につけた鈴が「チリン」と鳴ったのである。心にしみるような澄んだ音色だった。「いい音だなあ。私はもう一度その音色が聞きたくて、引き返して、でこぼこの上に乗ってみた。「チリン」「チリン」小さいけど、ほんとうに良い音だった。その日から、道のでこぼこを通るのが楽しみとなったのである。長い間、私は道のでこぼこや小石を、なるべく避けて通ってきた。そしていつの間にか、道にそういうものがあると思っただけで暗い気持を持つようになった。しかし、小さな鈴が「チリン」と鳴る、たったそれだけのことが、私の気持を、とても和やかにしてくれるようになったのである。鈴の音を聞きながら、私は思った。人も皆、この鈴のようなものを、心の中に授かっているのではないだろうか。』

私達は、日々様々な欲望という夢を追い求めながら生きている。欲望は、すべての進歩、発展の源であるが、社会規範、正義という目には見えない網の中ののみ存在すべきものである。この網からくぐり抜けるものは邪欲であり、よこしまな欲望である。厳しい競争社会の中で、己の欲望を満たす為に平気で他人を傷つけ、悩殺する邪欲が詭弁によって正当化され、いたずらに社会を混乱に陥れる現象があちこちで散見される。悲しく残念なことである。私達は、知らずして、いつしかこのような風潮に馴れ、何事にも無批判、無反応になるほど、心の琴線が緩んではいけないだろうか。

いまここに「鈴の鳴る道」の一読をお奨めしたい。

（「鈴の鳴る道」偕成社版）